

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
83	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Alcohol consumption as a risk factor for dementia and cognitive decline: meta-analysis of prospective studies. 認知症および認知機能低下の危険因子としてのアルコール摂取について：前向き試験のメタ分析から	
執筆者	
Anstey KJ, Mack HA, Cherbuin N.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Am J Geriatr Psychiatry. 2009 Jul;17(7):542-55.	
キーワード	
アルツハイマー病、脳血管性認知症、軽度認知機能低下、疫学、系統的レビュー、飲酒	
要 旨	
目的： 前向きコホート研究のメタ分析から系統的レビューを用いて、軽度、中等度または危険水準のアルコール摂取が、将来にアルツハイマー病(AD)、脳血管性認知症(VaD)、何らかの認知症、または認知機能低下を増加させるのかどうかを評価することである。	
方法： 適切なデータベースを用いて、アルコール、認知症の言葉があり、認知症や認知機能低下を結果として評価している文献を調査した。アウトカムはAD、VaD、何らかの認知症、認知能力、軽度認知機能低下、認知機能低下とし、アルコール摂取量により比較した。	
結果： アルコール摂取と認知症および認知機能低下の関係を、15の前向き試験のメタ分析を含む系統的レビューを用いて調べた。フォローアップの期間は2年から8年であった。14646人のAD患者、10225人のVaD患者、および11875人の何らかの認知症患者を含むサンプルに対してメタ分析を行った。軽度から中等度飲酒者におけるAD、VaD、および何らかの認知症の相対危険度は、全く飲まない人に比べて、それぞれ0.72(95%CI=0.61-0.86)、0.75(95%CI=0.57-0.98)、0.74(95%CI=0.61-0.91)であった。飲酒者では全く飲まない人と比較した場合、AD リスク(RR=0.66, 95%CI=0.47-0.94)、および何らかの認知症リスク(RR=0.53, 95%CI=0.53-0.82)の低下を認めた。飲酒者のVaDについては、評価するための十分なデータがなかった。高度飲酒者は全く飲まない人に比べて、何らかの認知症のリスク増加を認めなかったが、これはサンプリングバイアスを反映しているかもしれない。	
結論： この研究結果からは、アルコール摂取者は将来の認知症リスクが低下するといえる。このことが、後のコホート研究の開始に選択的な効果をもたらすかどうか、成人全てにおけるアルコール摂取の保護的効果を反映しているのかどうか、また将来にアルコールの特異的な利益をもたらすのかどうか、は不明である。	